勇者A

藍尽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者Ａ

【Ｎコード】

Ｎ６２４９Ｗ

【作者名】

藍尽

【あらすじ】

勇者Ａ（引きこもり少年）と勇者Ｂ（寝巻きジャージ美少女）と勇者Ｃ（リストラサラリーマン）。

え、マジでこの面子？　現地の追加要員も、なんだかやたらとアテにならない奴ばっか。戦闘能力ゼロな主人公（勇者Ａ）が奮闘する、でこぼこ冒険ストーリー。

01　さあ行こう、学校じゃなくて異世界へ。

俺は鈴木義也（すずきよしや）。高校二年生、に該当する年齢だ。

該当する――という言い方でわかるだろうが、俺は高校二年生ではない。高校生ではあるが。

なぜなら俺の高校に、学年、という定義が存在しないのだ。

多少不思議に思うかもしれない。けれど、世の中にはそういう高校もある。たとえば、定時制や通信制、といったモノに多いだろう。

全日制の高校に通えない人間が高校の卒業資格を求めるとき、辿り着くのはだいたいそのあたりじゃないかと思う。俺は通信制の学生だ。平成××年度生。俺たちの学校では、学年がないかわりに入学年度で学生を見分ける。とはいえ、既に別の学校で単位とっている奴が入学してきたりすると――残りの単位を取れば卒業できるわけだから、一年で卒業していく奴、とかもいて一概には言えない。逆に十年くらい在学してる人もいる。

そんなわけだから、在校生を見渡しても千差万別。たとえば俺みたいに中学から直で上がってくる奴、他の高校からこっちに入学しなおした奴、サラリーマンや漁師のおっちゃん、主婦のおばちゃん、腹に赤ん坊のいる女の子、白髪のじーさん。珍しいところで親子で高校生やってる奴。

自然とワケありの奴が多く在籍していて、中でも俺みたいな引きこもりはずいぶん多いだろう。全日制じゃ圧倒的少数派だが、通信制じゃありきたりすぎる類の人間だ。

とはいえ引きこもりの多い通信制でもスクーリング（登校し授業を受けること）はあるもので、そんな日は太陽の下をうんざりしながら歩かなければいけない。たとえば今日みたいに、だ。

「……」

黙々と地面を睨みつけて歩く。人通りは少ないが、それでも街中の学校。気は張るしその視界を、淡い花弁がひらりと通り過ぎてい

った。顔を上げれば小さな公園に満開の桜の花。
思わず吸い寄せられるように足を踏み出した。

その公園は、実に小さな公園だった。
道路に面していない三方は背の高いビルに囲まれ、日当たりは悪い。朝の日差しの差し込まない、薄暗い公園。ベンチにくたびれたサラリーマンが座り込み、小さな滑り台と砂場があるだけだ。それでも桜の木は公園の中央で、どっしりと根をおろし敷地をみな覆ってしまうかのように枝を広げている。その幹にそっと触れた。掌に伝わる、ひんやりとした微かな湿気による温度と、ざらついた木の表面の感触。ほう、とため息が零れた。木は好きだ。桜やけやきなんかの、枝を広げる木が好きだ。
そのまま俺は花を観賞しようと、伸ばされた枝を仰いだ。

そして、硬直した。

え。
いやいやいや。
ないないない、それはない。
思考はその景色を認識しようとはしなかった。したくなかった。よしんば冷静に受け止められたとしても、どう解釈していいかわからない。
着古してくたくたになった、ついでに色あせた濃紺のジャージ。それはいい。
ふわふわと柔らかな黒髪。それもいい。
しかしだ。

なんで、女の子が、枝に！！
寝転がってるんだ……！

これどんな突っ込み待ちだよ。すうすうと平和な寝息しか聞こえないってどういうことだ。あ、いや、雀がちちちと鳴いているが。
どうしていいかわからなくて、周囲を見回す。車道を乗用車が走り抜けていった。通行人はいない。そりゃそうだ、日曜の朝七時半。平日ではないんだ。かわりにぽつんとベンチに座り込むサラリーマン。ぴくりとも動かず、ただぼーっとしている。……それこそ、出勤日でもなんでもないだろうに。
脳みそが取り乱しているのが、自分でもわかった。ひらひらと花弁が降ってくる。そよそよと甘い風が吹く。
ふと、薄暗い公園なのに奇妙に明るくなったような気がした。ワントーン彩度が上がった、というべきか。色あせたように影の中に沈んでいた桜も、輝くように明るい。ふとその光源が地面だと気づいて見下ろした。
そこには、そう。俗に言う――。
魔方陣、みたいなのが公園をすっぽり覆い、発光していた。
「な――」
逃げるとか、そんなことに頭が行く前に。
光はひときわ輝いて、俺たちを飲み込んだ。

02　朝の挨拶、おはようございます。

地面が、光った――。
腕で目をかばう。身体が勝手に強張る。
アニメや漫画、ラノベじゃよくあるパターンだけど、日常生活でこんなのがよくあったら異常だ。
非日常だからこそファンタジーの分野があるんだろうけど。
ともかく、いきなり異世界、いきなり魔物発生、いきなり魔法発生、などなどなど、いきなり魔方陣が出てきて発光したなら、ぱっと思いつくだけでもそれくらいの問題は発生しそうなものだ。強張るのもしかたがないと思う。
瞼ごしに感じる光が少しずつ弱くなる。そろり、薄く右目だけを開けた。白くて明るすぎてまだよく見えない、何が――。
そう思った、その瞬間。
「ぐふっ！？」
上から激しい衝撃が降ってきて、俺は地面に押しつぶされた。
か、肩が。あばらが。腰がッ……！
「だ、大丈夫ですか！？」
硬い足音があわただしく駆け寄ってくる。俺は頬の下に感じる冷たい石の感触に気づいた。さっきまでの土の地面じゃない。
「あ、あの……、ど、どこか痛い……とか」
声は男のものだった。人を心配することに慣れていない、心配してもどう対処していいかわからない、……そうだな、たとえば育児も家事も奥さんに任せきりだった旦那が、突然家事と子供を残して奥さんがいなくなった、みたいなドラマの男優がこんな途方に暮れた声をしていたかもしれない。
どうなってるんだ、と声を出そうとして、圧迫された肺のために咳き込む。身体が痛い。

「あ、あああ、ええと、どければいいの……か……」
おろおろと歩き回る足音。汗が流れる。冷や汗だ。床に打ち付けたんだろう、肩や額が痛い。床に面していない背中や腰も痛いってどういうことだ――。ついでになんか、重いような。
「ぁぐうっ！」
ぐい、と肩に誰かが手をついて、体重をかけた。
「い、いだっ、い、つ、うっ……」
「んー？」
生理的な涙が滲む。どこか間延びした、寝ぼけたようなハイトーンの声がした。透き通っていて苦味も渋みもまったくない、綺麗な声だった。
唐突に俺は思い当たる。
「ど、け、ろっ……！！」
この痛みもこの重さの大元は――。
「ふあ……、おはよ？」
あの、枝の上の女の子が犯人だ、と。
「……あれ」
「あの……その、とても痛がっているようです、から……。どけてあげてくださいません……、か」
もっと言ってやれ、おじさん。とりあえず俺はまともに喋れる余裕がない。
「えーと……、あ、うん」
無造作に俺の上から立ち上がる。とはいえ気を配りはしたのか、全身の筋肉を使って俺の身体にいっさい体重をかけずに立ち上がったようだった。空気を肺に取り込む。上手くいかずに咳き込み、四肢に激痛が奔った。
「あー……、ごめん、重かった？」
「立て……なさそう、です、よね……？」
なんとか空気を取り込み、呼吸を整える。そのまま身を硬くして痛みに耐え、どこが痛むのか、ゆっくりと把握していく。

指。これは両手両足問題はなさそうだ。腕や足の痛みで痺れるような感覚はあるが、指そのものは痛んでいない。手首。右の手首は動かすと激痛が奔る。右の肘も同じだ。肩はなんともない。逆に左の肩は――だめだ。左手をすこし動かそうとしただけで痛む。

次に首、筋は痛むが、骨には影響なさそうだ。額――これはわからないけど、せいぜい擦り剥けているか、たんこぶ程度だろう。あばら。呼吸のたびに痛む。……ひびでも入ったかもしれない。腰、は打ち付けて痛いだけ、あっても内出血で済むだろう。左足は平気だけど、右の膝が妙に痛い。

骨折、ひび、合計で四、五箇所は覚悟する必要があるか。ゆっくりと左足を縮めて体の下に持ってきて、つま先を地面につける。

「あ、ぐ、い、つっ、ぐ、うっ」

うめき声が漏れるのはしかたがない、支えようとしてくれたサラリーマンのおじさんの手を遠慮して（どこもかしこも痛くて触ってほしくない）、右の肩で身体を支えながら、ゆっくりと身を起こした。

「あ、ふ、うっ……」

冷や汗がどっと噴出す。それでもなんとか立ち上がり、周囲を見回した。白い床。薄く光を放ち続ける、大きな魔方陣。太い柱には細かな装飾がびっしりと施され、――なんていうんだ、マリー・アントワネットとか、エリザベス女王とかを彷彿とさせるホールだった。神経質なほどどこもかしこも装飾で覆いつくしている。

思わずげ、と顔をしかめた。正直、俺はこの手のごてごてした――過密な装飾は好きじゃない。まるで平らで模様もでこぼこもない面が、ほんのすこしでもあるのは悪いことだ、と言わんばかりに、強迫観念に駆られたかのように装飾だらけ。女子の花柄のスカートとかも、色がひしめき合いすぎてかわいいとか思えないんだよな。とまあ、それは俺の趣味であって、それがかわいい、と思うのが悪いことだとは思わないけど。

ただこうもあたり一面徹底して装飾だらけ、とかをやられた部屋

にいつのまにかいる、なんて……気分のいいことじゃない。自分の意思でここに来たわけじゃないから、なおさらだ。修学旅行で強制的に連れて行かれるのも勘弁願いたいが、予告も了承もなしに連れてこられるのはもっと嫌だ。

「なんか……ごめん。重かった、みたい」

声をかけられて振り向くと、眠たそうな顔のあの子がいた。ゆるくウェーブのかかった黒髪に、とろんとした目。くたびれたジャージなのもあって全体的にまるでぱっとしないけど、まともな顔してまともな格好すれば、かなりの美少女じゃないかと思う。顔は小さいし、睫も長い。ただ、ジャージから覗く手首なんかは細すぎるし、胸も腰も薄いようだ。

でも、とりあえず。

「ああ。重かった」

「……だよ、ね」

ぼーっとしたまま、相槌を打つ。どこまで本気で謝っているのかわからなくて、いまいちいい気分はしない。次に、その一歩後ろに立っていたサラリーマンに視線を移した。ところどころ跳ねている、七三分けにした髪。四角くてえらの張った顔立ち。細い目がどことなく神経質そうな印象がある。体つきは、太っているわけではない。中肉、といったところだろうか。こちらも濃紺の背広に、ああ、通勤用の鞄を持っている。つま先の色の剥げた革靴は合皮なんだろう、白い地の色が出ていた。

鞄。そういえば、と思ったら、地面に俺の分も転がっていた。視線で確認すると、サラリーマンのおじさんが拾い上げてくれる。

「持て、る、……わけないの、かな」

気遣う、ということがものすごく苦手そうに、途切れがちにぎこちなく気遣ってくれた。

「すみません、が……、持っていただいても」

おじさんは頷いた。一度は緩んでいた痛みが、また強く主張し始める。手当てしないと、まずい。

「誰か……誰かいないか、探してきますよ。君たちはここで待っていてください」
おじさんはあわただしく、俺の鞄を持ったまま大きな扉から出て行った。
「……いればいいけど。誰か」
女の子がさめたような口調で言う。見下ろすと、眠たげな目がおじさんの背中から離れて俺を見上げる。ばたん、と大きな音を立てて扉が閉まった。それから、その視線は床の上を滑って自分の周囲をぐるりと見回した。
俺もつられて、視線だけで追える範囲を追ってみる。思わず息を呑んだ。
床が光っていたから、そして、柱や壁の装飾に気を取られていたから気づかなかった。
魔方陣は円を描いている。その外側にぐるりと――、白い服と白い靴が無数に散らばっていた。まるで中身の人間だけ消えた、とでも言うように。
「これ……は……」
「お約束的展開なら、勇者召喚か魔王召喚か、それとも召喚獣でも呼ぼうとしてお陀仏。……じゃないかな」

03　予鈴です。本鈴前に着席しましょう。

死んだ、という確かな証拠もないまま「人がいなくなった」ような現象だけ見せ付けられて、どう受け止めていいのかわからずに呆然としていた。

俺がそうしている間、その女の子は魔方陣を無造作に踏んで輪の外に出て、その衣類をひとつひとつ広げていっている。

「あ、まだあったかい」「指輪かな」「へぇ、これ他のより上等……」「あ、これ子供服」……悪夢だ。

なんでそんなに冷静なのか。何十枚、あるいは――数百枚、だろうか。この魔方陣は小さいとはいえ公園サイズなものだから、その端でぐしゃぐしゃになっている白い布の塊を判別するのは難しい。地道に一枚一枚広げて、そこに誰がいたのか手がかりを掴もうとするようにその子は服を並べ続けた。

「……なあ」

気づくと、俺は話しかけていた。声が広いホールにこだまする。呼吸のたびに痛む胸は、声を出すことでなお痛むけれど。

「なに？」

振り返りもせずに返事が返ってきた。相変わらず澄み切っていて、ペットボトル入りのミネラルウォーターみたいな声だった。

「なにか、わかるのか。それ」

「さあ。

でも、少なくとも……」

ごーん、ごーん。

鐘の音だ。どこからか聞こえる。

「……人、いるかもしれない。からくり仕掛けだったら違うけど」

言うなり、その子はホールを出て行った。鐘を探しに行ったんだろう。鳴らした人を見つけるために。

ため息をつく。「少なくとも」……何を言おうとしたのだろうか、

彼女は。
片足で、つま先と踵を交互に床につけ、ひねり、床につけてとじりじり移動する。突っ立っているだけでもつらい。
時間をかけて魔法陣の縁まで移動する。そうすると、その光景の異様さがしみじみとわかった。
魔方陣は部屋のちょうど中心に描かれている。しかし、部屋いっぱいに描かれているわけではない。
目測なので誤差はあるだろうが、この魔方陣が縦に二十、横に十五は入りそうな大きさのホールだ。そして、魔方陣以外の場所を全部、白い服が埋めている。
ゆっくりと左足を曲げ、右足を投げ出すように静かに座り込む。肩を動かさないように、左手でそっとそのひとつに触れた。少女か少年か。着用者はわからないが、華奢な人物でなければ身につけられないだろう、白く細い上着。ほんのりと暖かく、かすかな湿度を感じた。薄く柔らかな香りがする。
きっとあの眠たげな子と、たいして変わらない歳の少女だろう。白いけれど、裾や襟に刺繍やレースが施されていた。ひどく苦い思いが胸のうちに沸き起こる。そのときだった。
ごーん、ごーん。
鐘が鳴る。あの子はその鐘のもとに辿り着いただろうか。あの子は誰かに出会えただろうか。あのおじさんは。
天井を見上げる。びっしりと絵が描き込まれていた。こういうのを芸術的、と世間では言うのだろう。人間らしき生き物もたくさん描き込まれている。正直、俺は人物画も好きじゃない。写真を部屋に飾るのも嫌いだ。不気味には感じないんだろうか、世間の人たちは。
痛んだところが熱を持ち始めていた。起きているのもつらい、寝転がってしまいたい。けれどまた起きる苦労を考えるのなら、そう安易に寝転がるのは危険だ。じわりとまた浮き出す汗を感じながら、ひたすらに二人を待つ。

ややあって、慌しい重い足音が聞こえた。これは――おじさん、だろうか。
ばんっ、と荒々しく扉が開かれ、息せき切らしたおじさんが、二つの鞄を振り回すようにして入ってきた。額に汗の玉を浮かべ、息を弾ませている。
「君！　大丈夫でしたか！」
「は？」
意味を図りかねていると、軽い足音がものすごいスピードで近づいてきた。あの女の子も飛び込んでくる。
「光った！　平気……！？」
眠たげな顔はどこかに消え、ぱっちりと大きな目がまっすぐ俺を見つめている。ばら色の頬に汗で額に張り付いた髪。上下する薄い肩。
――くたびれたジャージとはいえ、表情ひとつで印象と言うのは変わるものだ。まるで咲きほころんだ薔薇、とでも言いたくなるような華やかなその子は、けれど俺を見つめるうちに落ち着いたのか、ほうと息を吐き出すとまたあの眠たげな顔に戻る。
「なんの……話だ？」
「君は光らなかったんですか。あの……二度目の鐘の音で、私は私の身体が光った、ように見えたのですが」
なんだそれは。
「あたしも。なんか、光った」
「俺は……、特になにいもなかった、はずだ。収穫はそれだけですか？」
尋ねると、おじさんは頷いて……けれどはっとして俺を見る。
「私は誰も見つけられませんでした。ただ、ここが城……、そうだな、高い塔や城壁のある、防衛のための城ではなく……、広い庭園と煌びやかな建物の、われわれ日本人の感覚から言えば「お屋敷」とか「館」とか言いたくなる外観の城だということはわかりましたよ。

つまり、寝室もある。……誰のかわからないものを勝手に、というのも気は引けますが、使わせてもらいましょう。あなたは休まなければ」

同意見だ。

肩を借りるにも右腕と左肩が痛む俺は、おじさんに心配されつつじり、じりと亀の……いや、亀はもっと早く歩くな。小学生のころ、教室で飼ってたけど意外にあいつら早い。兎ほどじゃないが。

ともあれ亀にも劣る歩みで時間をかけて外に出る。女の子は、「木切れとか包帯とか探してくる」と言ってさっさと出て行った。何も言っていないはずだが、骨折の可能性を考えに含んだようだ。――頭も、察しも悪いわけじゃないらしいな。

やっとの思いでホールを出ると、延々と続く煌びやかな廊下だった。

あとどれくらい歩かなきゃならないんだ、とうんざり思っていると、おじさんが話してくれる。おそらく、歩くペース配分を俺が考えられるように、だろう。

「向こうに最初の曲がり角があります。それを左に曲がると、およそ二百メートル程度の長さの廊下があります。この廊下は、客用なのでしょう。いくつものリビングに繋がる扉がありました。そのリビングを通ると寝室のある部屋へ行けます」

「ありがとうございます」

「いえ。……歩けそうですか？」

「ゆっくりとなら」

なにかできることはないかとやきもきしているようだが、とりあえず何もない。負ぶってもらおうにも、あばらもイッてるようだし。

休み休み、じわじわと前に進む。途中であの子が戻ってきて、「一番手前の部屋でいいよね」と木や布や、洗面器を運び込んでいた。今は水を汲んでは持ち込んでいるようで、どこかと部屋を何往復もしている。

ようやくの思いで廊下の角を曲がり、同じく煌びやかな扉を開い

て部屋に入る。長いテーブルクロスのかけられた丸テーブルに、背もたれから何から透かし彫りを施された椅子。壁にかけられたタペストリーや絵画。飾り棚。奇妙に高いところにある鏡は……、そうか、照明の灯りを反射させて、少ない光源を有効活用するつもりのもの、だろうな。薄く漂うアルコール臭が少し気にかかる。おじさんも奇妙な顔をした。

「先ほどはこんな臭い……」

「それ、あたし」

後ろからいきなり声をかけられて、思わず肩が震えた。……痛っ。

首だけで振り向くとあの子が立っていた。相変わらず眠たそうな顔で、腕に水の桶を抱えている。

「一応、ざっとお酒で水拭きしといた。強めの使ったから、ちょっとは効果、ある……といいな」

何を言われたのか一瞬戸惑い、――ああ、とすぐ思い当たる。

どんな菌がいるのかわかったものじゃないから、とりあえず最低限、アルコール消毒をしたのだろう。よく思いついたな、と感心する。

「布団も軽く拭いたから。もしかして、弱かったら酔うかもしれない」

「平気。俺の家系、酒豪だから。ありがとう」

こくりとふわふわした頭が頷く。それからもまた亀以下の歩みでリビングを突っ切り、ひとつの部屋に入る。幸いすぐ寝室だ。

広すぎるベッドには、紅いカーテンの天蓋がついていた。なんかで読んだな、そういえば。天蓋ってのは、天井から落ちてくる灰や埃を避けるためのものだって。

ゆっくりと座ると、おじさんが靴を脱がせてくれた。礼を言って足を持ち上げ、ベッドに放る。肩に気をつけて寝転がった。

ほっとしたとたん、ずきずきと痛みが増してくる。

「診てもいい？」

「診れるのか？」

ふわふわ頭が頷いたので、任せてみる。ただ、下手なことされたらかなわないので、その手つきをしっかりと視界におさめておいた。
「切るよ」
どこからか鋏を取り出して、右腕のシャツの袖を切る。それからざっと腕を見回す。
「あざはない、……腫れてもいない。やっぱり、骨？」
「たぶん」
「どこまでなら動かせる？　すこし痛くてもやってみて」
そんな感じでいろいろ調べ、（途中、何度か悲鳴を上げる羽目になった。なぜなら、乱暴ではないが腕を引っ張ったり、揺らしたり、皮膚の上から指で押えたりしていったからだ）最終的に彼女は言った。
「ひびか、骨がひしゃげてるんじゃないかな。肘のところ。見た感じへんなほうに曲がってるわけでもないし、完全に折れてはいないと思う」
「ひしゃげ……？」
「負荷がかかりすぎて、変形しちゃったんじゃないかって。あたしが落っこちて……転んだ拍子に、腕を床についたんじゃない？　自分の分とあたしの分が重力込みでかかってくるわけだから」
「……」
「あたしも医者じゃないし、簡単に調べただけだから、確かなこと言えないけど。
でも、手首はなんともないみたい」
「こんなに痛いのにか？」
「肘の痛みと連動して痛いように感じている、んだと思う。たぶん」
鵜呑みにする気は起きないが、参考程度に聞いておこう。くるくると木の枝を添えて包帯を巻き、固定する。クッションを持ってきてくれたので、その上に腕を置いて息をつく。
「ひびやひしゃげた……まあ、このひしゃげた、ってのも骨折の一種みたいだけど。

これなら、ひと月かふた月、安静にしてれば治るはず」
「時間がかかるのは覚悟してる」
こくんと頷き、次は肩を見る。
「脱臼……じゃ、ないみたい。よかった」
「それは同感だ」
「ただ腫れてる。打撲、かな。骨折も一応、疑っておいたほうがよさそうだけど」
同じようにしてあばら、足と調べる。あばらはひび、足は打撲の線が強い、と。胸にタオルを当てて、裂いたシーツで軽く圧迫するように縛るのが肋骨への処置だった。
「肋骨って放置だって聞いた気がする」
「呼吸で、痛むでしょ。だから圧迫する。肋骨そのものは固定できないけど」
たしかに、一気に楽になった。息はしにくいけど、痛いよりはいい。
「なんか、慣れてるな」
「バスケ部、マネだったから」
ああ……、バスケ部か。
それにしても、この眠たげな子がバスケ部なんてハードなスポーツのマネージャー？　なんだってそんな似合わないことやったんだか。
その子はタオルを水につけて絞り、打撲の疑いのある膝と肩に乗せた。
「ごめん。早く処置すればよかった。せめてアイシングくらいは」
「しかたがないだろ。過ぎたことだし」
「今晩、熱が出ると思う。看病はするけど……、つらいのは、覚悟して」
ため息が漏れた。
「あとは……喉。乾いてない？」
「あ、うん」

「飲んで。脱水症状になる」
コップを口元に持ってこられた。傾けられるので、むせないようにゆっくり口を開いて飲み込む。
――ぬるい。
思わず眉根を寄せると、あいかわらず淡々とした声がした。
「沸かして、冷ましたのだから」
そうか。水、そのまま飲める国少ないしな。
「台所、あったのか」
「……そうだ。ご飯、どうにか、しないと」
眠たげな顔が困ったように崩れる。俺とおじさんは首をかしげた。
女の子はおじさんに向き直る。
「あの」
「あ、はい」
「料理、できません、か」
「……」
おじさんの額に汗が浮くのを、俺は見た。
「……俺は一応、簡単なのはできるが……、もしかして、二人とも」
首を横に振る健康な二名。
おいおいおい……。
「く、果物やパンを探してきます」
慌ててておじさんは出て行った。

０４　いまさらですが、はじめましての自己紹介。

俺が横になっている間、二人はひたすらに情報収集をしてくれた。そして時々戻ってきては、報告を兼ねて退屈な俺に外の様子を聞かせてくれる。特におじさんは、部屋にあった羽ペンとインク、それから羊皮紙を使って大雑把なここの見取り図を描いてくれた。最初はペンを紙に引っ掛けたりしていたけど、それも本当にはじめのうちだけですぐにさらさらと使いこなす。図面も、フリーハンドではあるがずいぶん綺麗にまっすぐと線が引かれ、見やすかった。

「へぇ、すごいですね」

「そうでもないですよ。

じゃあ、簡単に説明しますね。ここがおそらく正門。私の身長の二・五倍くらいの高さの門と、その左右に門番用の詰め所のような小さな建物。敷地のまわりはぐるりと柵で囲われていて、薔薇が這っていました。満開に赤い薔薇が咲いていたところを見ると、日本よりも暖かいか……春先ではなく、春の終わりごろ以降の季節か、ということになるでしょう」

このおじさんは俺がずいぶん年下であるにもかかわらず、丁寧な口調だ。癖というか、もともとこういう言葉遣いなんだろうか。

そして、四月にしては暖かする気候、か。薔薇はたしか五月ごろから見ごろになるはず。品種によっても違うだろうけど……、五月から十月にかけてが薔薇の季節で、中でも五月、六月はとりわけ華やかだ。姉貴が薔薇酒作ってたのも春の終わりごろだったな。一番香り高い花はそのころを逃すと採取できない、とか言っていた。

「この門から城の正面まで、ざっと三百メートル。この間は庭園になっていて、薔薇の迷路になっているようです。迷路の中心に小さな東屋がありました。お茶用の席でしょうね。壁はなく、テーブルと椅子が見て取れましたから。

庭園に入らずまっすぐに城の正門に行くと、広々とした階段が十

二段。真鍮の手すりがついています。
　そうそう、この城の外観ですが、そうですね。四角柱状の建物が左右にあり、その間に長方形の建物が詰まっている、といった感じですね。この部屋やあのホールは、正門から見て右側の四角柱の中です」
「何階ですか？」
「三階になります。このフロアの図面はこちらですね」
　ん……？　やたらと何も書き込まれていないところが多いな。
「この余白部分……」
「秘密の部屋かなにかじゃないか、と思っています。外から測る建物の大きさと、内部の大きさがどうも合致しないんですよね。歩幅で測っているので、正確なことは言えませんが……」
「それにしたって広すぎませんか」
「ええ。ですから、なんらかの空間が隠されていると思っています。おもしろいものが見つかったらお教えしますね」
　おじさんはそう言ってまた城を調べに行った。退屈を持て余していると、ほどなくして女の子が戻ってくる。
「……退屈そう」
「何もできないからな」
　備え付けの椅子を引っ張ってきて、両足を抱え込むようにしてそれに座り込む。椅子に座る意味があるのか、その座り方。
「外、行ってみた」
「どうだった？」
「同じ。だれもいなかった。服だけあちこちで見つかったけど」
「あちこちって……」
「通りの真ん中とか、店先とか。どこも今さっきまで営業してました、人いました、突然消えました、って感じ」
　……ホラーでしかない。なんだ、それは。
「見た感じ、馬車とかあってまんま中世ヨーロッパ。……じゃないかな。歴史くわしくないから、時代はわからない」

「衣類の中から懐中時計なんかは見つからなかったか？」
「なかった」
きっぱり断定。きっと、裕福層の衣類をきちんと検分したんだろう。あのホールでやったように。
そうなると、産業革命時代の線は薄いのか。……いや、その前にここが「何」なのか、わかっちゃいないけどな。
手の込んだ大掛かり且つ悪質な悪戯や陰謀の類か、まじめに異世界トリップの類を検討すべきか……、もしくは俺の頭を疑うか。なんにせよ情報がない。
「一見して用途のわからない物は？」
「いくつかあったけど、いかにもアナログな感じ。ファンタジックなものは見つけなかった」
「そう……」
「どう思う？」
どう、ってのは、やっぱりこの「場所」とこの「状況」についてだろう。
「わからない。それに……、下手に推測してそれを思い込むことは危険だと思う。ただ、馬鹿馬鹿しい可能性でもあらゆる想定はしておくべきだろうな」
「同感。
城のまわりは貴族街、みたいなところ。その外周に高級店。さらに外周に裕福層、市場や一般住宅、城壁付近や城壁の外に貧民街、という印象。ただ、町は円形ではない。城を中心に分度器みたいに広がってるよ」
分度器。半円、って言いたいのか。
「城の後ろは？」
「湖と森。町に馬や鶏がいたから、人間以外の生命体は消えていない、と思う。危険だと思って調査はしてないけど」
「適切な判断だと思う」
こくりとふわふわ頭がうなづく。無謀な子ではないらしい。

「看板や飲食店のメニューは読めなかった。とりあえず、日本語、英語、中国語やハングルなんかの、日常的に見かける文字ではありえない」
「サンプルが見たいな……」
「これ」
差し出されたのは、装丁の施されていない本だった。中世ヨーロッパといえば革張りだと思って……あ、そうか。
「本屋かどこかから持ってきた？」
「貴族街みたいなとこで、不法侵入して安そうなの持ってきたけど」
相手に与える経済ダメージを考慮したらしい。
「そっか」
「それがどうかしたの？」
「装丁の本じゃなかったから。たしか、ヨーロッパ……の全域の文化かはわからないけど、昔、本は装丁して売られていなかったって」
「？　映画で見るのは革の本だけど。他の本は革張りのもあったし」
「気に入った本だけ、そうやって自分の好きな革で装丁するんだって。とりあえずページめくってくれるか？」
ぱらぱらと適当なところを開いて見せてくれた。
……うん。よくわからん。
謎の記号がずらずらと綴られている。あえて言うならアルファベットに近い気はするけど、筆記体みたいだし……、とりあえず縦書きじゃなくて横書き。それだけしかわからない。
押絵もなく、市販品というよりは個人の記録を綴った感じだ。文字に洗練された感じがないし、右肩上がりの癖の強い字みたいだ。
「ほかの字もこんな感じだったか？　俺はこれ、手書き文字……というか、市販品とは思えないが」
その子はまじまじと本を見て、こくりと眠たげな目で頷いた。
「看板はもっと綺麗だった。何も考えないで持ってきたから」
「印刷された字は見た？　本に限らず、メニュー表とか」
「見てない。全部手書きだったよ」

「新聞はあった？」
「そういえば……、どこにもなかった」
「水道も？」
「井戸はあった」
「台所は見た？」
「竈と薪が積まれていた。煮こぼれたシチューもあったけど」
「火の始末もされてないのか……」
「店ではテーブルに食べかけの食事が残ってた。猫が肉をがっついてたよ」
「時代がえらく後退していることを除けば、動物は地球と似ているのかな」
「柴犬とかは見なかった。いたら笑えたのに」
笑えたのか。というか、笑えるのか、この子。
「あと、すごく不思議なことがある……んだけど」
眠たげな目を瞬かせて、どこか困ったように小首をかしげる。先を促すと、あっさり彼女は言った。
「駆けずり回っても疲れないし、息切れしないし。変に腕力もついた気がする。重たそうなドアあっさり開くし」
「……」
「数時間で街を一通り駆け回れるほど体力馬鹿になった覚えはないんだけど」
「……それ」
「やっぱりおかしいよね？」
「おかしい、よな」
いかにもなトリップ特典、主人公補正……、勇者召喚に定番の妖精や女神の類にも会わなかったし、召還された先は城でも不気味なほど無人。この状況下でトリップ特典？　典型的なのに、奇妙に薄気味悪い。典型的でも薄気味悪いだろうが。
「頭がぼーっとする、幻覚が見える、幻聴が聞こえる、などの自覚症状は？　逆に冴えすぎている、でもいい。普段と違うか？」

「ないよ。君もひとりに見えるし、思考も、あたしが把握している限りでは正常」
「薬物を盛られた可能性が否定しきれない。少しでもおかしいことがあれば、俺かあのおじさんに言うんだ」
「そうする」
幸いなのは、三人の誰一人として取り乱していないことか。……取り乱そうにも、どこから取り乱していいのかわからない、というのがあった。今までは。
ただ……。
この子の自己申告を鑑みると、体内で変化が起こっている可能性がある。それが起爆剤にならない可能性はない。
俺は動けない。この子は自分の身体の変化に気づいた。おかしいことだらけだ……。

ずきん、ずきんと身体が痛む。じわりと汗が滲み、呼吸が浅くなる。
息苦しい。
額に乗せられたタオルはずれ落ちてきて左目を遮る。俺の体温を吸って生ぬるくなったそれが邪魔で、頭を振って顔の横に落とした。熱い。口の中に熱がこもり、空気を吐いても適温には戻らない。ろうそくはもう親指の爪くらいに短くなっていて、いつ消えるかわからない。おじさんは椅子にもたれて眠りこくっていた。あの子は……、ああ、いた。ベッドのそばの床、じゅうたんの上で丸まっている。土足の国だろうから、汚いだろうに。
城を調べたおじさんも、結局おおざっぱな見取り図を作ることができた程度だった。人には会えず、人外にも会えなかった。生きていたのは動物と植物、それから俺たちだけ。
じわじわと滲む汗が気持ち悪い。クーラーがほしい、せめて氷を口に入れたい。いや、無理でも水くらい……。
どうしても我慢ができなくて、どくん、どくんと脈打つ患部にう

んざりしながら身を起こした。ぎしぎしに固まった筋肉のおかげで動きにくい。
足を床におろす。履きっぱなしだった靴下ごしに、ふわふわしたじゅうたんの感触。落ち着かないし汚れるだろうけど、気を回す余力がない。
片足でじりじりと移動する。この、じゅうたんというやつは厄介だ。片足で歩くと足をとられやすい。転ばないかと冷や冷やする。
それでもなんとか水差しの置いてある小さなテーブルに辿り着く。……あ、まずったな、手が使えない。
目の前に水があるのに飲めない、そんなジレンマでもどかしさを味わっているときだった。

――っく。ひ、ひっく、う、うぁ……。

「……？」
泣き声……だろうか。子供の、甲高くて柔らかい声。未発達な声帯から出る特有の柔らかさは、どんなに頑張っても大人には出せない。
まさか……幽霊、とかか？　ファンタジーな展開なら妖精とかそこらも検討する必要があるだろうか。どうしようかと考えて、とりあえず俺は満足に歩けもしない。二人を起こすか。疲れているとこ悪いけど、水も飲みたいし。
「おい」
揺するに揺すれず、声だけかける。
「おじさん、あんたも」
――そういや名前、聞いてなかったかもな。いろいろありすぎて忘れていた。
「起きてくれ。なあ」
「ん、うん……」
「う……」

うめき声と共に、よろよろと二人は身体を起こした。疲れているとはいえ、こんなよくわからない状況だ。眠りは浅かったんだろう。
「どう……したんです、水とか？」
「それもあります」
おじさんがふらふらしつつ水差しからコップに水を注ぎ、飲ませてくれた。冷たくはないが、俺の体温よりは低い温度だ。それにほっとする。
「ありがとうございます。それと、さっき子供の泣き声みたいなのがして……」
ぎょっとおじさんは目を見開いた。
「人？　なら、探す……」
ふらふらと女の子は出て行く。
「え、ちょ、ま、待ってください、おかしいじゃないですか、どこを探しても誰もいなかったのに、いまさら子供！？」
おじさんの悲鳴に、その子は眠たそうな、間延びしきった声で返した。
「最初から、ぜんぶ、おかしいんだから……、いまさら常識、とか、ありえない」
ふらぁ、と部屋を出て行く。どうしようかさんざん悩んだ後、おじさんは意を決したようで……、顔を上げると俺を見た。
「君、ここを出てはいけないよ。何があるかもわからないから。そして、何かあったら大声で呼んでくれ」
言うなり、返事も待たずに出て行く。
膝がすこし笑っていたのは……うん、まあ、見なかったことにしておこう。

しばらくすると、二人は三人になって帰ってきた。
細胞分裂。じゃなくて。
「どうしたんだ？　その子」
ぎゅう、とおじさんの手を掴んで離さないのは、おじさんの胸く

らいまでしかない女の子だった。金髪に、白人特有の薄い肌。そばかすだらけで少し丸っこすぎる顔が、ろうそくだけの光でも見て取れた。服は真っ白い豪華なドレスなのに、奇妙にみすぼらしく見える子だ。

「あのホールの前で泣いてた」

端的な女の子――ああ、女の子が二人に増えたからややこしいな。でも、この眠たそうな子は金髪の子より年かさだろう。中学生、くらいだろうか。白人の年齢はよくわからないけど、日本人の感覚に当てはめれば小学校高学年。実際はもっと年下なんだろうけど。

「とりあえず、われわれも自己紹介もしていませんでしたから。ついでにやってしまいませんか」

おじさんはそう言うと、まず自分から話し出した。

「私は井村建設のＣＡＤオペレータ、大石大吾（おおいしだいご）と申します。三十九になりました」

「俺は……二高通信制学科、鈴木義也です。高校二年生相当の年齢になります」

「根岸第一中学校、宇田郁美（うだいくみ）。イミって呼んで。中三」

視線が金髪に集まった。つーか、今更だが通じるのか、言葉。

「う、あ……。

マルガリータ・トゥル・ト・アシュベル……九歳」

通じた。九歳かよ。でかいな。

「マルガリータさんのおうちはどこだい？」

おじさ……大石さんが膝をつき、視線を合わせてたずねる。ぎゅう、と大石さんの手を握り締め、マルガリータはぼそぼそと喋った。

「こ、ここ」

「ここか、ずいぶん広いんですね。お父さんやお母さんは？」

じわ、と目に涙が浮かんだ。ふあ、とあくびをかみ殺す宇多さん。……イミさん？　まあどっちでもいい。とりあえず不謹慎だ。あくびはやめろ。

「お、お父様……、勇者様を呼ぶ、って」

思わず顔を見合わせる俺たち。
「そ――、それで、その、お父さんはどこに？」
大石さんの問いかけに。
マルガリータは、堰を切ったように声を上げ、泣き始めた。

０５　召還物の面倒は、最後まできちんと見ましょう。

結局、マルガリータが泣き止むことはなかった。いや、泣き止むには泣き止んだが、眠っただけだった。

謎はさらに謎を呼び、既に推測とか憶測のできる状況じゃない。ぜんぜんピースが足りていない。

「起きませんね……」

他の部屋に放っておくのも気が引けるし、この非常時に生きている人間で離れ離れになるのは遠慮したい。そんなわけで、マルガリータはリビング……というか、応接室？　から引きずってきたソファに寝かせていた。ロココっぽい金で縁取られた、豪奢すぎるソファに毛布。温暖な気候と、まだ子供なのですっぽりソファにおさまってしまうサイズが幸いした。心配そうに大石さんはマルガリータをちらちらと見つつ、パンを千切ってスープに浸し、俺の口に運んでいた。イミさんは椅子の上で膝を抱え、パンをかじったままうつらうつらとしている。

ちなみに、このパンは固くてあばらのイッてる俺は噛み切るのがつらい。なわけでスープなのだ。このスープもパンも台所にあったのをそのまま持ってきただけ。どうも残り物らしく、材料はいくらでもあるのに調理済みのものは今日食べ尽くせばなくなってしまうだろう。

食物も見る限りはヨーロッパとそう変わりはしないらしい。変な色や形はしていない、とのこと。それでも奇妙ににんじんが苦かったりするのは、品種改良されていないせいだろう。日本のスーパーに売られているもののほとんどは品種改良した食べやすいものだ。なるほど、このにんじんを食べると、昔子供が野菜嫌いだった理由がよくわかる。俺はもう味覚が大人に近いからたいして苦ではないが、独特の苦味というか……、薬草食ってるような味なんだよな。これ。

時間をかけて俺が食い終わると、大石さんは食器を片付けはじめた。イミさんとマルガリータの分を残して大きな銀の盆にのせる。
「今日はどうしますか？」
俺が問いかけると、困ったように眉尻を下げる。えらの張った顔立ちは奇妙に神経質に見えるのに、そうして困った顔をしているとずいぶん印象が緩和されていた。
「マルガリータさんを放ってはおけませんし……、しばらく目覚めるまで、待っていたいんですけど……」
「わかりました。今のところ、唯一の手がかりでもあります。賛成します」
ほっとしたように大石さんは肩の力を抜く。だから、なんでそうたかが高校生をそんな対等に扱えるんだ。俺なら絶対見下しているところだぞ、ふたまわり以上離れた子供なんて。
それは大石さんの美点でもあるけど、なめられそう、って意味でもあるんだよな。人間がどこにもいない、とは限らないから、不用意に甘く見られる態度はしないほうがいい、と俺は思うんだが……、無理して倒れられても困るし。ふてぶてしく振舞うのは苦手じゃないから、そのへんは俺が出張ればいいか。
――なんでオマエ、そんなにかわいくねぇんだよ。物言いキツすぎるんだって。
ふと記憶が蘇ったのを、無理やりに蓋をする。今そんなものにかかずっている場合じゃない。
「イミさん」
「ん……」
「寝るなら寝る、起きるなら起きる。しっかり分けたほうがいい」
「んー……」
「パンかじったままだし……、もういっそ寝たらどうだ」
「ねる」
起き上がって三つほど椅子を連結したかと思うと、白雪姫よろしくその上に寝転がった。

……寝にくくないのか、それ。
「宇田さん、器用ですね。
マルガリータさんも起きる気配はないですし……、私、ちょっと本でもとってきますね」
「あ、はい」
苦笑しつつ大石さんは出て行く。まったく律儀な……。
……ん？
本……って、読めるのか？　あのおじさん。

結果を言おう。
持ち込んだ、おそらく城の書籍を普通に読んでいた。
「あの、大石さん……？」
「あ、はい。何か？　お手洗いですか？」
声をかけると、普通に紐を挟んで本を閉じる。
「いやその……、読めるんですか？」
「読めない本を眺める趣味はないですよ？」
……何か、根本的なところ食い違っちゃいないか……？
俺はすこしばかり黙った。頭を整理するためだ。
大石さんも黙った。俺の言葉を待つように。
「……大石さん、それはどこの言葉で書かれた本ですか？」
「ええと……、たしか、クルベルア語だったと思います。クルベリア語のコーナーから取ってきましたから」
「……そんな言語、地球に存在してましたっけ」
「いえ、ないはずですが？」
……ふむ。
地球にない言語。大石さんはそれが読める。そして大石さんにとって、それは少しも問題ではない。むしろ俺が疑問に思っている理由がわからない。
となると……。
「大石さん、俺、何人に見えますか」

「一人にしか見えませんが」
そりゃそうか。人間がダブるくらい視界がおかしけりゃ、本なんて読めないよな。
「俺にはそのタイトルすら読めませんよ。なんだってそんなの読めるんです？」
そう言うと、大石さんは目を見開いた。
「読めないんですか？　これが？」
「少なくとも俺が人生この方習ったのは、英語と日本語のみ。日常会話に不自由せず読み書きできるのは、日本語くらいのものです」
「いえ、私も英語は苦手ですが……、私の目にも習った覚えのない文字に見えますよ、これは。でも、なんでか文字を追いかけると、しぜんと意味がわかるんです。そうですね、脳内にいつのまにか、クルベリア語の読み書きについてインストールされている感じ、でしょうか。
独特のことわざや言い回し、慣用句になると意味がわかりませんが……、日本語に類似するものなら脳が勝手に認識しているようですね」
ぞっとした。
まさか脳みそをいじられたんじゃないだろうな。なんでそんなに平然としてるんだ、このおじさん。
「すっかりお二人も同じことになっているのかと思いましたよ」
はは、と笑う。空元気には見えない。特に気にしていないんだろう。神経質そうなのに。イミさんだって自分の身体を不気味がったみたいなのに、なんで若者二人より順応早いんだ。
唖然としているとその理由を察したようで、大石さんはすこし困ったように笑う。
「この歳になると、いろいろ、諦めが早くなるんです」
それにしても異常なくらいおおらかだぞ。それは。
「納得できなさそうですね。……そうですね、私も平時なら納得できなかったと思います。正直、自分でも驚くほど混乱がない。

……混乱がない、というより、現実逃避の一種なんだと思いますがね」
ふと自嘲めいた色が瞳に浮かんだ。
「リストラされたんですよ。……妻になんと言っていいかわからなくて、日曜出勤だ、なんて嘘をついてね。あの公園でぼうっとしていたんです。だから、私にとって『これ』は……言い方は悪いですが、夢の中にいるようなものでしてね。現実味もあまりありません。
私としては、君や宇田さんが落ち着き払っているのも奇妙に見えますがね。私のようではないみたいだし」
「よしてください。俺も……、引きこもりなんですよ。一応高校の卒業資格だけ、取っておかないとヤバいかと思って通信制に通っています。スクーリングだったんですよ、日曜。
だから、俺の日常なんてゲーム三昧です。夢と現実の区別ついてないのは俺のほうですよ」
現実逃避な二人、ってわけだ。俺たちは顔を見合わせて少し笑いあった。大丈夫、笑えるうちは……、なんとかなる。そう思いたい。
少し空元気だった。少し、無理をして強がった。それはたぶん、大石さんも同じだと思う。
でも今はそうする以外にどうしたらいいのかもわからない。
「あっ……、それじゃあ、勇者についてとか、すみませんが調べられますか？」
「ええ、ちょうどその記述を探してるんですが……、どうも普通の御伽噺しか見つけられなくて。今は歴史書を読んでいたんです。しかし、私は昔から歴史が苦手でして……、こう、次々と名前や年号や地名が出てくるでしょう？　もう、正直なにがなんだか」
「検索が使えればいいんですけどね」
「はは、私が子供のころには、パソコンもインターネットも普及していませんでしたから。昔に戻ったと思って、気長にやりますよ」
そう言って大石さんはまた本のページをめくった。
俺はこの手だし、まあ、手が大丈夫でも本なんて読めないわけだ

から、えらく暇になった。
ぼーっとしていると、もぞもぞとソファの上の物体が動く。ややあって、ごろん、と床に落ちた。
「……」
大石さんは気づいていない。真剣に本にのめり込んでいる。マルガリータはもぞもぞと毛布の下でもがき、ややあってもそりと顔を出した。腫れぼったい目が丸っこい顔をことさらにコミカルに演出している。……冷やしてあげればよかったな。
「おはよう、マルガリータ」
「お、おはよう、ございます」
おろおろとマルガリータが挨拶をすると、大石さんがはっと顔を上げた。慌てて本を置いてマルガリータの手を取る。
「おはようございます、マルガリータさん。
朝ごはんはどうですか？」
「……たべ、ます」
大石さんはマルガリータを膝に乗せて、冷めたスープとパンを食べさせ始めた。膝の上、というのにマルガリータはずいぶん戸惑っていて、しまいには降りてしまったけど。
それから顔を洗わせて、イミさんを起こす。
「マルガリータさん、私たちは昨日、ここに来ました。けれど、どうしてここにいるのかわかりません。
このお城にも街にも人はいないようですが、どうなっているのかわかりませんか？」
マルガリータはぎゅっとドレスのスカートを握り締め、しばらく俯いていた。けれど、青ざめた顔を上げて俺たちを見回す。
「ゆうべは……失礼、いたしました。
改めまして、あたしはアシュベル王家第十八王女、マルガリータ・トゥル・ト・アシュベル。今代の、召喚の巫女の役目を仰せつかいました。
父及びすべての王族、臣下にかわり、勇者様のご来訪を心より歓

迎いたします」
　無理した言葉ではあったが、意味もわからないものを丸暗記した、わけではないようだ。しかし……。
　この、ちっちゃくて丸顔でそばかすだらけの、ドレスを着ているのに奇妙にみすぼらしい子が王女で召喚の巫女……？　厄介ごとの臭いしかしないぞ、俺には。
　俺は大石さんと視線を交わした。向こうも苦い顔をしている。イミさんは……、いいからパン齧るのやめようよ。空気読めよ。いや、無理は言わない。もう動くな喋るな黙ってろ。それが一番安全のような気がする。
「マルガリータさん、どうして君だけ残ったんだい？」
「勇者様をお出迎えして、道をお示しするのが役目です」
「君以外に誰もいないのはどうしてでしょうか」
「勇者様をここに招くため、皆の肉体と魂は世界のハザマというところに、いきます。……と、聞きました」
　世界のハザマ……狭間、か。
　大石さんは質問を続ける。
「どうしてそこに行かなければいけないんだろう」
「ええと、魔術師のかたが言うには……、いなくなる理由は『シチに入れるようなもの』で、もうひとつ、『集めたすべたの力を勇者に渡す』ためだそうです」
　シチ……、質、か。勇者がここに来ている間、俺たちの命……魂の担保としてこの国の人間が根こそぎいなくなった、ってことか？　んな無防備な。
　そうだとしても、城も街も……、話を聞く限りじゃ、長時間自分たちがいなくなる準備なんて、なにひとつしてなかったようだし。
「集めた力を……？」
　大石さんが反応したのは、そっちのほうだった。こくりとマルガリータが頷く。
「わがアシュベル王国ひとつぶんの、体力と戦闘能力、魔力や知力。

すべてを勇者様に与えるため……です」
「ふーん……」
イミさんが納得したように頷いた。……そうか。大石さんが本を読めたのも、イミさんが無尽蔵な体力を誇ったのも……、待て。俺はじゃあなんだ？
魔力だと気分的に嬉しいが。
「そうか……。では、マルガリータさん。どうしてあなたが巫女だったのでしょう」
大石さんの言葉に、マルガリータは肩を跳ねさせた。
「あなたはまだこんなに小さいし、お父さんもお母さんもいないところに一人ぼっちで……知らない人を出迎える。それは、あんまりにもひどいことだと私は思うのですが……」
ぎゅう、とスカートを握り締め、マルガリータは沈黙した。寝起きのままでぼさぼさの金髪がうつむく。
そして、だいぶ待った後にようやく小さな声で言った。
「あたし、が……、いらない子、だから、です」
ああ、やっぱり厄介ごとだった。
たぶん彼女は、普段は省みられることのない子だ。第十八王女、つまり他に十七人王女がいる。既に嫁いだ人もいるかもしれないが、召喚の巫女なんて大層な役職につく人間は他にいくらでもいていいはずだ。
なのに彼女が残された。能力でもなく、外見でもなく、性格でもない。
きっと側室かなにかの子だ。地位の低い、女性の。
誰もいない国にたった一人で、どこの誰かも分からない、そのくせ力と知能が強力な「勇者」の出迎え。
年頃のきれいな女の子を残すんじゃどうなるかもわからないし、地位の高い子を残すのも危ない。どうなったって構わないような子が残された、……そういうことだろう。
ひどく苦々しい心地になる。

「私たちは、帰ることができる？」
「はい。魔王を倒していただければ、必ず」
だろうな。国王はじめとした全員が質にとられる召喚なんだから、帰れる、と考えるのが自然だ。
「帰ったとき、私たちの世界はどうなっているだろう？　たとえば、御伽噺で百年後に帰ってしまった……といった話なんかは、私たちの世界にもあるのですが」
「あ……、すみません。お帰りになられた勇者様が再びおいでになったことはないので、その」
わからない、と。
「いいよ。気にしないでください、君の責任ではないですから。私たちのやることは、その魔王さんを倒すことで間違いありませんか？」
「はい」
「魔王さんは私たちの世界にはいなかったので、いると世界はどんなふうに困るのか、簡単に説明してもらえますか？」
「あ、はい。
魔王、というのは、人の心の闇だと聞きます」
「心の……闇、ですか」
「御伽噺なので、どこまで本当かはわからないと聞きます。
ええと、それで……、魔王がいると、それだけで周囲を毒がとりまき、土地も水も腐ってどんどん人の住めるところがなくなっていきます。
そうすると、その土地の植物も動物も人も、腐って死んでいきます。けど、時々死なないで、変に順応してしまうのがいて……。
それを魔物、と呼んでいます」
……なるほど。まあ、国民が根こそぎいなくなっている以外は、比較的ありきたりな勇者召喚物、と。
そういうわけで、俺たちの召還された経緯は（どのくらいが真実なのかはさておき）判明した。

しかし、なんと言うか……。
呼んだなら、そのあとのアフターケアもちゃんとしろよ。ちっこい女の子ひとりポツンと置き去りにして何やってんだよこの国は。
「魔王はどこにいますか？」
おそらく、この話の中では最後になるだろう質問を大石さんは投げかけた。
マルガリータは窓の外をキッと睨み（丸顔で腫れぼったい目の子供なので迫力はない）、きっぱりと言う。
「西の果てに」
……お嬢さん、今朝顔を出した太陽の方向を鑑みるに、そっちは南だ。

06　一時間目は歴史の授業。最初ですから古代史です。

とりあえず、与えられた情報をそれぞれの中で消化しよう、ということになった。

「あたし食べ物捜してくる」

パンを咥えたまま、イミさんは出て行く。

「裏づけの情報を探します」

マルガリータを連れて、大石さんも出て行った。もっと有用な書籍か書類か、ともあれそんなものを探しに行ったのだろう。

そしてまた、俺だけベッドの上に取り残された。

……虚しい。すごい虚しい。

すでに見つめすぎて模様を覚えてしまった、天蓋の天井の蔦模様。紅いカーテンは一見派手に見えるけど、色に深みがあってかえって落ち着きのある色調だった。他の家具が煌びやかだから、よけいにそう見える。

首だけ回して部屋を眺めた。とりあえず、普通の学校の教室が四つ入るくらいには広い。壁には空のクロゼット、俺よりでかい姿見、豪奢な飾り棚。どこだか知らないが、広大な湖と山脈、湖畔の城の絵。

暇だ。とにかく暇だ。

一応、その間に脳内整理。

マルガリータの話を、とりあえずすべて真実だと仮定しよう。

まず、召喚の巫女。このさい名称のありきたりさは置いておくとして、だ。

一、今代はマルガリータ。今代、というところからして、勇者に巫女はセット物の可能性高し。

二、マルガリータのいらない子発言から、巫女は誰でも構いはしない、という可能性が高い。

三、巫女の役目は出迎えと案内人。勇者のマニュアル兼ナビゲータ。どこまで役立つか不明。
四、戦闘能力には期待できそうもない。
マルガリータについてはこれくらいか。召喚と送還については、一、なんで俺たちなのか不明。ランダムなのか基準があるのか指名制なのか。
二、召喚には国ひとつの人間が「質」に持っていかれる。その間国は空っぽ。危なくないのか？
三、「質」に入ると、そのぶんの能力が勇者に付与される。
四、魔王を倒せば帰還が可能。ただし本当に帰還したのか、元の土地、元の時代に戻っているのかまったくの謎。
そんなところだろう。勇者と魔王は……。
一、勇者は召喚で呼ばれた人間。魔王を倒すのが仕事。
二、魔王は心の闇が発生源？　マルガリータが御伽噺と言うくらいだから、現地の人間にとっても信憑性はうすい、と。
三、魔王がいると環境汚染が激しすぎて迷惑。西の果てにいるらしい。
四、報酬とか危険手当とかないのか？
んなとこか。いくつかはあとでマルガリータに聞いておこう。
そういや、魔王の外観とか倒し方とか能力とか、そういうのは聞いてないな。
レベル上げが必要なんだろうか。……脳みそがゲーム仕様になってる気がする。そんなことをつらつら考えつつ、痛む身体にいらいらしているとイミさんが戻ってきた。
「どうかしたの？」
「魔王を倒すなら、やっぱり基本かなって」
そう言って持ってきたのは、やけに立派な剣に鎧、金貨や宝石……。
「……どうしたの？」
「宝物庫見つけたから。

魔王を倒すのは王様の意思。王様の意思で呼ばれた勇者。勇者が魔王を倒すためにとる手段は正義」
目が据わっている。
……実はいきなり喚ばれたこと、根に持ってるんだな。イミさん。
「いいと思うよ。でも、よく見つけたね？」
「えらそうな服を漁って鍵を見つけて、鍵で重要そうな部屋を開いて、部屋の中から鍵を見つけて、そんな感じでいくつも捜し続けて見つけた」
執念深いな。意外と。
しかし、身体はなくなっていても洋服とかが残っていたのは幸いだった、と言おうか。鍵がなけりゃ開けないからな。逆に、俺たちの洋服が俺たちにくっついてきたのも幸いだった。召喚後マッパとか遠慮する。全力で。
「あたしはそれだけ。水飲みたいとか、なんかある？」
「強いて言えば、暇でたまらない」
「解決のあてないよ、あたし」
「だろうな」
別に期待はしていない。じゃあね、と言ってまた出て行くイミさんを見送って、また退屈な時間を過ごす。暇すぎていらだちもピークに達しようかというころ、ようやっと大石さんとマルガリータが戻ってきた。
「お疲れさま。何かありましたか？」
「いくつか気になることが。その前に昼食の準備をしてきますね」
「あ、マルガリータは残ってくれるか？　いくつか質問がしたい。暇でたまらないんだ」
「は、はい……」
戸惑いつつもマルガリータは椅子を引っ張ってきて座る。その際立派な剣や宝石が部屋の隅に転がっているのを見つけて複雑そうな顔はしたが、特に文句を言うそぶりはなかった。
「あの、どんなことでしょうか」

「正直わからないことだらけなんだけどな。
召喚の巫女、ってのは誰でもなれるのか？」
「いいえ、王族で未婚の女性、……その中で最も周囲の愛情を受けた人間、です」
「理由は？」
「初代勇者様との取り決めだったと思います。……他人を無断で呼び出すのだから、もっとも高貴で貴重な人間が迎えるべき、とのことでした。そして、勇者様が女性の場合はどうしたって同性のほうがいいだろうから、と」
「……君以外は、全員結婚したのか」
「はい。……あたしを残すために、昨年、全員が婚儀を迎えました」
そこまでして勇者に渡したくなかったのか。……気分が悪い話だな。
「君の事はマニュアルとナビゲートができる人材、だと俺は思っているけど、実際どのくらいのことができるんだ？　地理を把握しているとか、旅ができるとか」
「ええと……、あたしは、その。お母様は側室にもなれない身分の人でした。
だから、お料理とか繕い物くらいならできます。あとは簡単な魔法と、大雑把な西の果てに行く道のり……くらいでしょうか」
「魔法って、どんなことができるんだ？」
「あたしは魔力もあんまりなくて……。灯りとか、水を出すとか、擦り傷を治すとか……それくらい、です」
「武器は？」
「……運動とか、苦手で」
まあ、俺もだけど。
晴れてマルガリータは戦力外確定、と。
「勇者の召喚には基準があるのか？　こういう人がいれば召還、とか、そういう優先順位」
「いえ、聞いたことはない、です」

そう言ってから、あ、と何か思い当たったような顔をした。見つめると、少し困ったような顔をしながら説明する。
「その……、召喚陣は、初代の勇者様が組んだものだ、という話を聞いたことはあります」
「なんだ、それ。初代勇者はこの世界の人間だったとか？」
「いえ、異世界の方でした。ただ、当時のことはあまりよくわからなくて……」
「それって何年前？」
「八千年は昔だと」
そんなにかよ。
つーか、少なくとも八千年、人間が生きていながらこの程度の文明レベル？　マジでか。
「その勇者って……？」
「ナーサ様といいます。世界に広がった天変地異をすべて治めてしまった素晴らしいお方だって……聞いています。
ええと、たしか本名は……、ナガサワレイ様とおっしゃったはずです」
……。
「なぁ、そのナーサさんについての本とかないのか？」
「御伽噺になりますけど……」
一言断ってから、マルガリータはどこからか本を持ってきて読んでくれた。
「むかしむかし、世界は滅びを迎えていました。
日照りと豪雨、押し寄せる洪水と不作。嵐と竜巻、やまない雪と砂の大地。
たくさんの人が亡くなり、たくさんの国がなくなりました。
その中で、ディアデスタ王国が立ち上がりました。
数々の国が滅びる中、ディアデスタをはじめとしたいくつかの国は、小さくなりながらも残っていました。
このままではディアデスタもなくなってしまいます。王様は、魔

術師に命令しました。
『この世界を救いなさい』
その命令を受けた魔術師は、一人の女の子を召喚しました。黒い髪と不思議な顔立ちの、小さな女の子です。
女の子が祈ると、世界は息を吹き返しました。
王様や国民はとても喜びました。ずっとずっと女の子を大事にしようと言いました。
けれど女の子は、西の果ての魔王を倒して自分の世界に帰りたいと願い、旅に出てしまいます。
それ以来、その女の子の姿を見た者は誰もいません」
ぱたん、と絵本が閉じられる。ちらりと押絵が見えた。
「その勇者の絵、見せてくれないか」
「え？　……あの、はい」
もう一度開かれた絵本。マントを羽織った黒い髪の女の子。開襟シャツに紺色のリボン、プリーツスカートに白いソックス、そしてローファー。
……どっからどう見ても、女子学生。
それに、公害じゃなくて天変地異で召喚されている。魔王を倒さず祈っただけで改善してるし、魔王を倒したんだかどうかも定かじゃない。そもそも魔王なんて「ナーサ」が言うまで誰も言及してないぞ。
「……魔王ってどんな奴だ？　姿とか能力とか」
「えと……、あたしたちは会ったことがない、です。初代勇者様が『すべての根源は魔王だから、魔王を倒す』と言われただけですから……」
「実際のところいるかどうかもわからない、ってことか」
へにょりと眉を下げるマルガリータ。となると……、魔王うんぬんが完全に狂言で、単に城にいるのが嫌で「ナーサ」は逃げ出した、なんて可能性もあるわな。
「そういえば、ディアデスタ王国だっけ？　その国って今どうなっ

てるんだ？」
「滅びました」
あっさりした返事に、つい俺は妙な顔を作ってしまったと思う。マルガリータが俺を見て、慌てて言い訳するように説明を付け加えた。
「えと、滅びたのは初代勇者様が去られてから三百年後。西にありましたので、魔王の毒が侵食してあっというまに」
「勇者を生んだ国が魔王に滅ぼされたのか……。皮肉だな」
「ですね」
あっさり頷くなよ。意外と黒いなマルガリータ。
「じゃあ、二代目勇者は？」
「召喚陣を持ち出した宮廷魔術師がエルクアル王国に落ち延び、そこで召喚されました。この方は……ええと、サトウシンヤ様とエナミアイカ様、オオクボヒロカズ様のお三方です」
また日本人オンリーかよ。
「勇者に選ばれる基準、本当にわからないのか？」
「え？　ええ……。魔術師の皆さんが、召喚陣を改良したくてもプロテクトがかかってて手が出せない、とか仰っていましたし」
「改良？」
「その……、「質」にとられると、召喚の巫女以外は本当に根こそぎ国民がいなくなります、から……。その間に国土が荒廃して滅びた国が多い、です」
そりゃそうだな。
「よくそんなハイリスクで召喚なんて……」
そう言うと、マルガリータは視線をおろおろと彷徨わせた。じっと見つめると、観念したように口を開く。
「わが国は……、王都こそ見栄を張っています、が、十年前……ベルデスタ王国との戦争に敗戦、して……。
戦費と賠償金に首が回らず……」
圧力かけられて貧乏くじ引かされた、と。

「じゃあ、もしかしてこのあと」
「はい。半月したらベルデスタから迎えが……。ベルデスタ国王にご挨拶をした後、西の果てへ魔王討伐に赴くこととなり、ます」
「半月したら……。もしかして、質の対象は国民として登録している人間、ではなくて国土にいる人間？」
「どちらも対象になります」
嫌がらせじゃないのか、その召喚陣。
もしかして、初代勇者って召喚されたことにものすごく腹が立ってたんじゃ……？　それで全力で嫌がらせみたいな召喚陣組んだとか……。ありそうだよな。
「挨拶って、よろしく俺たちが勇者だよ、みたいな？」
「はい。そんな感じで結構です」
「マナーとか知らないけど」
「かまわないと思います。あたしもよくわかりません、し」
「忠誠とか要求されたりは？」
「あったらびっくりです。確か三代目の勇者様が、ある国で忠誠を求められて王城を吹っ飛ばしています、から」
容赦ないなおい。死傷者膨大じゃないのかそれ。
「そういや、俺らは何代目？」
「二十七代目になられます」
「初代以外はずっと三人ずつ？」
「えと……はい。そのはずです」
「俺たちはいきなり異世界にさらわれて来た上に強制的に労働を言い渡されるわけだけど、報酬はないのか？」
「……お望みであれば、この世界の中からお好きなものをお好きなようにお持ちください。
城のものも、市井のものでも、勇者様が望まれるのであればあたしたちは拒めません」
「この国の、ではなくてどの国であっても？」
「そうです」

それも初代勇者との取り決め、ってやつなんだろうか。
ナーサ。ナガサワレイ。一人だけの勇者。たぶん、この世界が大嫌いだっただろう女の子。
それでも召喚陣を残したまま、いるかどうかもわからない魔王を倒すと言った女の子。
その子は日本に、帰れたんだろうか。

07　二時間目は魔法理論。教科書とノートはありますか？

しばらくするとイミさんが帰ってきて、大石さんがパンとスープを持ってきてくれた。相変わらず背中にクッションを並べて身体を支えた格好で大石さんに食べさせてもらい、マルガリータが食後のティーが必要だというので退席する。イミさんも大石さんも、ティーバックすら使ったことのないツワモノだったためだ。多少家事のできるマルガリータは、小さいとはいえ台所では貴重な戦力。むしろ現状、唯一の戦力。腕前に期待したい。主に今後の食卓のために。

そんなわけでマルガリータから得た情報を二人にも流す。大石さんは、いくつかの話については書物からの裏づけが取れたと言った。

「確かに歴史の本などには、歴代勇者の名前があります。初代勇者はナガサワレイさん、さすがに漢字はわかりませんでしたが。

私が調べられたのは彼らの名前と、いつ召喚されたのか、という二つの情報くらいですね。全員日本人らしき名前でしたよ」

マルガリータはわからない、と言っていたが、召喚の基準に日本人であること、という条件が入っているようだ。

「イミさんは？」

「お城を家捜ししてみたけど、確かにあまり裕福な感じはしなかった……かな。

家具とかも、あたしたちにとっては古びてていかにもアンティーク、って思うけど、たしかに新しくて高価なものはないみたい。客間とか広間とかは豪華だけど、個人の部屋になると一気に質素になってたし」

素人のイミさんが見ても明らかに質素になってるって……どんだけ落差激しいんだ。

「城下は？」

「あっちは普通に裕福な中世、って感じに見えたよ」

「敗戦から十年。能力のある商人などはむしろ力をつけている時期

だと思いますよ」
大石さんが付け加える。……それもそうか。
しかし、その中で十八人も娘のいた今の王様……。何やってんだか。まあ、マルガリータは敗戦の前後あたりに生まれたのだろうから、それを考えると娘たちが生まれてから負けた、ゆえにしかたがない、という味方もできなくはないけどな。
そうして待っているとマルガリータがティーセットを載せたカートを押してやってきた。俺たちにも紅茶を淹れてくれたのだが、微妙にぬるくて不味い。マルガリータも困った顔をした。
ともあれ、だ。
「俺としては、魔法っていうのが気になる。教えて欲しいんだが」
「あたしも」
「私も興味があります。マルガリータさん、少しでいいので教えていただけませんか？」
マルガリータは不味い紅茶をソーサーに戻して、困ったような顔をした。
「あの、でも、あたしはまだ初心者で……」
「マルガリータさん、あなたが初心者なら、私たちはまったく何も知らないのですよ。
教師になってくれ、とは言いません。ちょっとだけ教えてくれませんか？」
ちょっとだけなら、とおずおずマルガリータは了承した。そして、魔術書が必要だというので取りに行き、何冊かの本を抱えて戻ってくる。
茶色や赤の、皮張りの本。金の装丁が施されている豪奢なもので、表紙や背表紙には金色の紋章みたいなものが飾られている。
「えと、あたしも使ってるやつ、です。
こんなふうに、紋章のついているのが魔術書、といいます。これがないと魔術は使えません」
「杖はいらないの？」

イミさんがたずねた。マルガリータは首をかしげる。
「杖を使うのは、古代の技で……、初代勇者様のころに廃れた、と聞いています」
また初代勇者か。どんだけこの世界に影響与えたんだ、ナガサワレイさん。
「えっと、魔術には、魔術式が必要、です。その魔術式が専用の紙とインクで記されたものが、これ。
紋章は執筆者によって違う、らしいです。えと、あたしはこの、執筆者エリシエラ・ヴェルグのが一番相性がいいです。同じ明かりの術でも、あたしはロナルド・マクデールの書だと発動もしません」
極端だなオイ。
明かりの魔術式はこのページです、とそれぞれの書を開くマルガリータ。その式を指で撫でて呪文を唱えれば、どんなに魔力の扱いが下手でもイメージができなくても、とりあえず光りはするらしい。明かりに関してだけは。
「どれどれ……、『リヒト』おお、つきました」
「あたしはワルメルギス・ル・クラウディアと相性がいいみたい」
次々に試す大石さんとイミさん。マルガリータが次々と本を広げて、俺の手の下に本を置いてくれる。ゆっくりとまるで読めない字面をなぞった。
「『リヒト』……一応成功、か」
ぱっと一瞬だけ頭上で灯った明かりに苦笑する。結局、俺はマルガリータと同じエリシエラ・ヴェルグの書と相性がよかった。大石さんはベルタベルタ。そうして相性のいい執筆者が判明すると、マルガリータは一冊ずつ俺たちに本を贈呈してくれた。
「今お渡しした本の中には、危ない術はひとつもない、です。ある程度使いこなせたら、もう少ししっかりしたのをお渡しする、ので……今はそれで我慢して欲しい、です」
不安そうに見上げられて、大石さんはすぐに頷いた。
「その前に、あたし字、読めない」

「俺も」
「……」
マルガリータがしまった、という顔をする。大石さんが苦笑した。
「マルガリータさん、読み仮名を我々の国の言葉で書き込んでも大丈夫ですか？」
「……お勧めは、あんまりできないです、が……、普通のペンと普通のインクで、その書に書くなら」
話を聞くと、術ごとにインクを調合し、一定の法則で書き込んであるのが魔術式。紙や装丁も術の行使にあわせてあつらえてあるもので、本来はシミひとつですら禁忌。
ただ、初歩の初歩であるこの書については大雑把でもいい加減でも見逃される……ある意味マージンのようなものがとられていて、そうだな、術の行使にノイズが入るような感じにはなるが、できなくはない、と。
このノイズがあまりに大きくなりすぎると、激しいノイズの入ったテレビが画像を映さないように、術として形にならなくなってしまうらしい。
マルガリータが普通のペンと普通のインクを用意して、絶対に魔術式にインクがかからないように、と厳重注意をしながら大石さんに渡した。大石さんは頷いて、俺とイミさんの書を翻訳していく。
とはいっても、インクを完全に乾かす必要があるから、見開きを翻訳したら乾かして待つだけになった。
「ねぇマリー」
「……？　え、あ、あたしです、か？」
イミさんの突然の呼びかけに、マルガリータはびっくりした様子だった。
「マルガリータって、愛称マリーじゃないの？」
「えと……、だいたいマルゴって」
「なにそれ、日本人的感性では却下。あんたマリー」
がーん、とあからさまにマルガリータはショックを受けたようだ

った。もちろん頓着するイミさんではない。
「で、マリー。魔術師、いちいち本開いて文字なぞって呪文唱えて魔術を使うの？　めんどくさくない？」
あ、それは俺も聞きたいかもしれない。
「マルゴが却下……、あたしって……あたしって……」
「マリー、寝言ならベッドで言ったほうがいい」
「う、うわーん！」
わざとらしく大石さんに抱きつくマルガリータ。苦笑して大石さんは抱き上げた。大人の包容力だな。
「すみません。たぶん、宇田さんに悪気はないと思うのですが」
「うううっ」
ぐずるマルガリータをあやす大石さん。しばらくそうして気も紛れたのか、ややあってマルガリータは説明をした。
「熟練すると、本を開いて呪文と魔力を注ぐことで魔術が使えます」
「マリーはできるの？」
「できません……」
ちょっと涙目だった。
「ええと……どうしても本は開かなくちゃいけないのか？」
俺の問いかけに、こくりと頷くマルガリータ。
「必ずです。それ以外の方法での魔術は、完全に淘汰されました。初代勇者様を召喚する際の災害でその術が失われたとも、初代勇者様がなんらかの儀式を行ったせいだとも言われていますが、確かなことはわかっていません」
そしてやっぱりナーサなのか。どんだけなんだナガサワレイ。謎だ。謎すぎる。
「会ってみたかったな。その人」
イミさんが言った。同感だと思う。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6249w/

勇者Ａ

2011年10月1日03時23分発行